府顧問等歴任。

○陳澄波　本校在校中帝展に入選、七星画壇・赤陽洋画会を組織。卒業後帝展その他日本、台湾の諸展に出品。上海の新華芸術専科学校、昌明芸術専科学校、藝苑絵画研究会等で指導。台陽美術会創設会員。

○廖継春　台展審査員、台陽美術会創設会員。

○王白淵　上海美術専科学校に勤務。美術評論家として活躍。

○陳植棋　卒業後七年間在日。帝展、台展、光風会展、槐樹社展、白日会展等に出品。七星画壇、赤島社結成に参加。

一九三〇年代卒業者

○何徳来　帰郷して新竹美術研究会を組織したが、再赴日し定住。戦後は新構造社の主要メンバーとして活動。

○郭柏川　北平芸術専科学校、京華美術専科学校で教え、一九四八年台湾に定住。成功大学建築学系で教え、台南美術協会を組織。梅原龍三郎の友人。

○陳慧坤　台中商業学校、台湾師範学校、台湾師範大学で教える。

○李梅樹　台展、新文展に出品。台陽美術協会創設会員。解放後文化学院美術系教授、国立芸専教授（一九六七年彫刻科を開設）、師範大学美術系教授、中国美術協会理事長等を歴任。外に長年にわたり精力と資金を傾注して郷里三峡鎮の祖師廟を再建した。

○李石樵　本校在校中に帝展に入選。以後帝展、新文展に出品。裸婦に力量を示す。帰台後台北の自宅で李石樵画室を開き、後進を育成。台陽展に出品。

一九四〇年代卒業者

○廖徳政　開南商工、実践家専、国立芸専等で教え、紀元美術会、青雲美術会に所属。

なお、付記すれば、台湾近代美術史の研究が盛んに行われるなかで、最近の研究として紹介しておきたいものに顔娟英著「殿堂中的美術・台湾早期現代美術与文化啓蒙」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』第六十四本第二分。一九九三年）があり、そこに掲げられている参考書目も大変参考になる。台湾では個々の作家の回顧展もよく行われ、作品集の出版も盛んである。上記の李梅樹などは幾種類もの画集が出ているだけでなく、去年三峡鎮中華路に記念館ができて留学時代の資料なども展示され、また、祖師廟へ行けば、彼の指揮のもとに台湾の彫刻師たちが伝統的技術を駆使して彫りあげた精緻な彫刻群を見ることができ、業績の全貌が把握できる。何徳来についても、彼は主に日本で活動した人だが、平成六年末から七年春にかけて台北市美術館で「何徳来九十紀念展」が開催され、その独自の画風と足跡が広く紹介された。今後本校留学生たちの業績の調査・紹介は益々進展を見るだろう。

③　板垣鷹穂の在外研究

大正十三年四月二十一日、西洋美術史授業担当講師板垣鷹穂は文部省在外研究員（私費）を命ぜられた。

板垣は明治二十七年十月十五日東京に生まれ、大正四年九月から同十年三月まで東京帝国大学文学部撰科に在学して専ら西洋美術史を研究。同十年四月に矢代幸雄西欧留学中の本校西洋美術史授業担

任に起用された。彼にはすでに西洋美術史に関する著述もあったが、更らに研究を深めるため私費留学を希望したもので、申請が許可されて一応文部省在外研究員という肩書が付けられた。彼は大正十三年八月二十八日に出発。イギリス、フランス、ドイツ、イタリアを見学して翌十四年四月十四日に帰国した。昭和五年十二月に講師を解嘱となるが、その解嘱辞令案には「大正十三年九月以来無給」とあり、帰国後発行の『東京美術学校一覧』においても名が削除されているので、渡欧後は授業を行わなかったと考えられる。

④ 鎌倉芳太郎の琉球美術研究

鎌倉芳太郎は明治三十一年香川県に生れ、同県師範学校を卒業して本校図画師範科に入学、大正十年三月に卒業した。その後直ちに沖縄県女子師範学校訓導兼教諭兼同県立高等女学校教諭として赴任。そこで琉球美術の研究を始めた。同十二年四月には改めて本校図画師範科研究生となり、従来の研究を纏めて「琉球美術史論」(一)、(二)と題し、『東京美術学校校友会月報』第二十二巻第四、第六号に発表した。それは琉球の歴史の概要と画家の自了について記したもので、論文の最後には近代日本において最初に自了の芸術を嘆賞した人としての、また、琉球美術の最初の研究家としての岡倉天心に対する賛辞が記されている。

こうした熱心な研究が正木直彦に認められ、彼は正木の紹介で東京帝国大学教授の伊東忠太博士の指導を受けるようになり、さらに大正十三年三月三十一日には正木の計らいで本校助手（美術史研究室勤務、無給）となり、また、翌四月には沖縄出張を命ぜられた。彼は伊東忠太と共同研究の名義で啓明会から一ヶ年三千円の補助金を受け（以後二回追加、計一万円）、沖縄に滞在して資料収集等を行い、特に旧首里王府の紺屋を捜し出し、型紙や染手本を集め、また紅型の技法を会得した。翌十四年の春に帰京した彼は本校写真科の一室で資料整理にあたり、同年九月には校内で展覧会を開いて一般の関心を呼び起こした。この展覧会については『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第四号に左のように記されているが、『十三松堂日記』を見ると、正木も彼の活動には並々ならぬ関心を寄せていた様子である。

琉球藝術展覽會　伊東工學博士及び本校師範科卒業生鎌倉芳太郎氏の共同研究にかゝる琉球藝術資料の整理略ぼ成りたるを以て、啓明會の主催にて、去る九月五日より三日間本校に於て開會せられたり、當日は伊東博士鎌倉氏採集の藝術資料の外、琉球出身の東恩納、伊波兩文學士の蒐集にかゝる文書、伊東博士採集の生物、植物園栽培の琉球植物までも出陳せられ、殊に鎌倉氏採集の資料は繪畫、彫刻、漆工、陶磁工、染工、織工、刺繍工、金石工の各部門に亘り、採集範圍は琉球本島より八重山群島にまで及び、寫眞並に實物を合せて三千餘種の多數に達し、觀者をして同君の努力の非凡なるに驚嘆せしめたり、尚開會中連日講演及び琉球音樂の實演あつて展觀と相俟つて琉球の歴史、文學、美術、音樂、天産に亘りて琉球の文化及び自然を一擧に了解せしめられたり、三日間の來衆凡そ五千名に上り近時稀なる盛會なりき。